
ある内戦

竜騎士そらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある内戦

【著者名】

竜騎士さりひ

2019年7月

【あらすじ】

どこか遠く辺境の小国で内戦が起つた。少女がひとり、そこで戦つていた。

正義も確固たる目的もなく、ただ戦うだけだった。

1 戰争

どこかで爆発音がした。続いて、いくつかの銃声。間違いなく、どこかで戦闘が起こっている。どこかで人が死んでいる。

でもそんな事どうでもいい。

ここでは日常的におこることなんだから。

「嬢ちゃん。おい嬢ちゃん。起きる」

明け方。日の光はまだ弱く、辺りは薄暗い。

ここは、アフリカの辺境の、とある小国、その首都郊外。もはや廃墟と言つて構わないぐらいに破壊しつくされた町で少女、レイア・シロガミは起こされた。

「ん……敵ですか？」

レイアは起き上がり、傍らのAK-47、あるいは開発者の名を冠してカラシニコフとも呼ばれるアサルトライフルを手にした。

歳の頃14歳。日系人の顔立ち。結構な美少女だ。

レイアは自分を起こした相手の男を見つめ、聞いた。

「どこ？」

「接近中だ。まだこちらには気づいていない」

男は40代前半のがっしりした体格で、やはり手にAKを持っている。この男の名は、ダンと言つ。

「そうですか……んー」

レイアは一度大きく伸びをして立ち上がった。

今、二人がいるのは破壊の後に取り残された何かの建物、その二階。破壊の跡は凄まじく、前の大通りに面した部分の壁がぼつかりとなくなっている。

レイアはその大通りに面した部分まで歩いていった。敵が接近し

てこるといふことは、この通りをじらりに向かってきてこることだろう。

ぱっかりと開いた大穴の所に、狙撃銃を持った一人の女性がいた。

スコープで遠くを見つめている。

「おはよ、リリ、敵襲は？」

「接近中。大通りの向こうから。距離12キロぐらい」

「規模は？」

「歩兵100人、トラック一台に分かれて乗つてると、歩いているの。徐行運転でこっちに向かってる」

「了解」

「ジエスターはもう降りたのか？」

後ろからダンが声をかけてきた。

「うん。降りた」

「そうか。嬢ちゃん一人も早く準備しろ」

「了解」

と、言いつつレイアは自分のカラシニコフ銃を見る。

扱いやすいことが特徴のこの銃は、いつでもすぐに撃てるようになっている。準備完了だ。

「まずはトラックを止めなきやな。お前達に任せていいか？」

「うん」

「わかった」

ダンの問いに女二人が応える。

トラックがだんだん近づいて来る。

「……レイア、いける？」

リリが話しかけてきた。

「うん。いつも」

「じゃ……合図するから」

「うん」

レイアは狙撃銃のスコープを覗き見る。

スコープの向こうにはトラックの運転手。周囲を警戒しつつ徐行運転中だ。

もつとも、こちらには気付いていないのだが。

傍らにはリリが、同じ姿勢でもう一つ、後ろのほうのほうのトラックに狙いを定めている。

背後にはダンが、カラシニコフ銃を構えている。

ジエスターの姿は見えないが、下のどこかにいるのだろう。自分も準備はできている。完璧だ。

「じゃ……いくよ……一……一……三……三……撃て……」

レイアは引き金を引いた。

トラックのフロントガラスを銃弾が突き抜け、次いで運転手の頭を貫通した。

制御を失ったトラックはすぐに失速する。後ろのトラックにも同じ事が起こった。

荷台の上の兵士のうち何人かは転げ落ちた。歩いていた兵士は銃を構え狙撃手を探して辺りを見回した。

その兵士達に銃弾が降りそそぐ。

トラックの運転手を狙撃すると同時にダンがカラシニコフで敵を撃つた。レイアとリリもすぐに銃を持ち替え発砲を開始する。セレクターをフルオート射撃にして雨あられと銃弾を浴びせる。

眼下で兵士達が体から体液を撒き散らしながら死んでいく。ある者は頭を粉碎された。そのすぐとなりで別の兵士の腕が根元から吹っ飛び、血飛沫があがつた。

兵士達はまだこちらの位置に気付いていない。もつとも、捕捉されるのは時間の問題だが。敵は徐々に散開している。その内何人かはこちらの建物のほうに近付いている。すぐにこちらの姿を捕らえ

るだらう。

セレクターをフルオートから単発に切り替え、こちらへ向かう兵士を狙い撃ちしていく。こちらの位置を教えるような行為だが、直接見つかるよりずつとましだ。

突如として爆発音がして多くの兵士が倒れた。

ここからは目視ができないが、おそらく倒れた兵士の体にはいくつもの金属片が刺さっているのだらう。

「ジョンスターだ。」

下に降りていたジョンスターが絶妙のタイミングで手榴弾を投げてくれた。

投擲した位置はもちろんここから離れている。多少の攪乱にもなるだらう。

と、銃弾が尽きたのに気が付いた。フルオートでは一分あたり六百発の弾を撃つこの銃では、撃ち尽くすのは一瞬だ。

「装填中！」

レイアがそう叫ぶとダンとリリが即座にレイアの守備範囲をカバーする。

一方レイアは敵兵から自分の銃に移し、は大きく湾曲した弾倉を素早く取り外し、新しい弾倉をはめ込む。そして左手で装填レバーを往復させた。顔を上げ敵兵の方を見つめ、「装填終わ……りや？」

語尾が変になってしまった。

敵兵が全滅しているのが見えた。

「もう……みんな手際良いなあ……」

レイアはそう言いつつ銃口を下ろした。

乾いた大地はすぐに死者の血を吸う。血でぬかるんだ地面が朝の日差しを鈍く反射する。

レイアとダンは下に降りていた。ジョンスターと合流して死体を確

認する。リリはまだ上で周囲を確認している。

まだ息のある兵士がいると容赦なく弾丸を撃ち込んだ。使えそうな弾薬を持つていれば、もらつておく。

レイアはうつ伏せになつている死体を注意深くひっくり返した。死亡を確認すると田印として死体の手を胸に置かせた。さて、次は……

「……がはあ……」

突然、レイアの近くの、倒れていた兵士が声をあげた。腹を撃ち抜かれていて、そこからどくどくと血が流れている。

「たとえ俺達が死のうとも！ 革命の火の手は！ 正義のた」

パン

乾いた銃声がして、銃弾が兵士の頭を炸裂させた。脳のかけらと血がまき散らされる。

兵士は叫び、何かを訴えるつもりだったようだが、その願いは叶わなかつた。

レイアにはそれを聞くつもりは無い。聞く義理も無い。

そうでなくとも、危険因子は排除すべき、とか、単にうるさいというだけでも、射殺の理由には十分だつた。

死人に口無し。

死者は銃を握れない。

「大丈夫か？」

ジェスターが駆け寄つてくる。

「うん。大丈夫、だよ。……」

レイアは今自分が射殺したばかりの兵士を見つめた。横にジェスターが並ぶ。

「革命の火の手……正義の……戦い、かな？」

「だろうね」

「ま、何だつていいけどな……しかし、こいつらも、……革命なんかに参加しなかつたら、死ぬことなんて無かつただろうにな……」

「仕方ないよ。そういうものなんだから…………」

革命。

彼らは、この国に行く末を憂い立ち上がった、革命の戦士達だつ

た。

2 革命

ほんの一ヶ月ほど前まで、この国はアフリカ大陸の辺境の、どこにでもあるような小国で、1980以降急速に数を減らした独裁国家の、数少ない残った国の一つだった。

大戦の終結後、相次いで大国から独立した国の一つで、社会主义国家から独裁国家に変貌した典型的な例だった。

政権、大統領とその取り巻き達の下に人民から搾取した富が集中する。国民達は貧しく、辛い生活を強いられ、飢えが蔓延する。

非常にわかりやすい構図だ。その状態が長い間続いてきた。

その均衡が崩れたのが一ヶ月前。きっかけはやはり簡単。

一ヶ月よりさらに前のいつか、誰かが革命を起こそうと画策した。その誰かが、どんな人かをレイアはよく知らない。他のみんなも噂では、若い男で、頭の良い人という。わかっているのはそれだけ。その男がこの国の独裁体制を打破し、民主主義国家を作るために、革命とそれによる政権崩壊を画策し、国中に同志を配置して、武装を整え蜂起した。それが一ヶ月前。

小さな国での内戦だ。そんなに大きな規模になるものではない。政権はそう考え、自国の軍隊だけで短期間で鎮圧できると考えた。実際、それはじごくまつとうな考え方で、今の状況に対し政権に思慮がないとか、考えが浅はかと言うならば酷というものだろう。しかし読みが外れたのも事実だ。

革命の首謀者はかなりの策士だった。方法は不明だが、必要な武器弾薬その他の物資を実に効率良く集め、巧みな戦術でこの国の軍隊を翻弄した。

もちろん軍部も素人集団ではない。むしろ戦争のプロであり、民間人あがりの民兵に引けをとるものではない。しかし状況が悪すぎた。

もしかしたら成功するかも知れない革命に、国民の大半が何らかの形で参加し始めたのだ。

実際に銃を手に取り戦いに加勢することを望む者もいた。革命の首謀者は彼らに気前よく武器を渡した。

自分達の財産を提供しようと思つ者もいた。首謀者はそれを、大いに感謝し、受け取つた。

誰もが革命に協力し、国家に加担しなくなつた。つまり、国家は国民全体と衝突することとなつた。国家とは、国民の存在無くしては成り立たない物であるにもかかわらず。

こうして、全国民、全国土を巻き込んだ武装蜂起は、圧倒的な武力を持つた軍部と、その他においては勝つてゐる革命軍とで膠着状態に陥つていた。

それが一ヶ月前まで。

一ヶ月前、政府は膠着状態を解消するために一つの決断をした。

レイア達、傭兵の利用だ。

現在、世界中のいたるところで戦争や内乱が起つてゐる。そしてその戦場ではかなりの高確率で傭兵の姿を見ることができる。傭兵とは、金で雇われてどちらかの側につき、戦闘に協力することを生業にしている者達だ。

実力はこの国の軍人よりも格段に高い。まして、武器を手にしただけの民間人とは、雲泥の差である。

レイアも傭兵で、アフリカ各地を練り歩きつつ戦争に参加して生活している。

ダン、リリ、ジェスターも同様である。彼らはもともと、個人で活動していたが、偶然、意気投合したために固まって動くことになつた。戦闘、特に弾切れの起こる銃器を使う戦闘には、弾倉の交換時に援護してくれる存在が必要だ。

ともあれ、傭兵達の協力を得た政府軍は革命軍を圧倒していつた。

傭兵の撃つ銃弾は革命軍の命を次々に奪つていった。革命軍も反撃はしたが、ほとんど意味をなさなかつた。

そんな状況が一ヶ月ほど続いた。

そして今に至る。

全員分の死亡を確認した後、四人はレーシヨン（軍用携行食）の朝食をとることにした。

「結局のところ、革命軍の戦力はどのくらい残つてるんだ？」

「さあね……でも、さつき全滅させた規模の部隊が、あと二三あれば……多いほうじゃないかな？」

「だな」

ジェスターとリリーがレーシヨンを食べながらなにやら会話しているが、レイアは気にせず、銃の整備を始めた。

「だとすると、革命軍にもう勝ち目はないね……あつても困るけど」「だな……」

「革命軍も、チャイルドソルジャーとか使つたら、勝てたかもしれないのにね」

「そうだな……使つてたら、厄介だつた。なにしろあれは、なりふり構わずかかつてくるからな……」

「まるで、理性が無いみたいに」

「まあ、実際に連中には、理性や正気なんてものは無いんだがな……」

「……」

「だよね。だつて……」

「おい」

リリーの言葉をダンがいらだたしげに遮つた。同時に、レイアを警する。レイア本人はまだ、銃の整備に集中している。

「あ……」

「むう……」

リリーとジェスターがばつの悪そうな表情をした。

「レイア……ごめん。あなたのこと、忘れてた……」

「はい？」

レイアは急に話をふられ、急いでさつときまでの会話を思い出した。

理性　正気　革命軍　チャイルドソルジャー　……

「あ…………」

チャイルドソルジャー。それがダンの気に障つた言葉だ。レイアはだいたい、状況を悟つた。

「んつと…………気にしなくていいですよ～昔の事なんですから。えつと…………」

「いや。よくないこと思ひださないで……」

「むー」

レイアは気に入らないとばかりにむべくれた。

「別にいいじゃないですか。私が…………チャイルドソルジャーだったなんて」

「…………」

「…………」

「…………」

三人は一様に黙つてしまつた。ややあって、ダンが口を開く。
「レイア…………確かに、俺は…………俺たちはチャイルドソルジャーについて認識が足りないのかもしれない。忌むべきもの、と。そう考えていい。レイア。お前にとつてはどうなんだ？」

「えつと、私にとつては…………間違いなく、私の過去の一部です。た

だの事実で、わざわざ恥むものとは思つていないです」

「そうか…………なあレイア。できれば教えてくれないか?
お前がチャイルドソルジャーだった頃のことを

「…………」

レイアは少し逡巡して、頷いた。

「わかりました。…………何から話しまじょうか…………」

レイアは自分の幼少期、つまりチャイルドソルジャーになる以前のことを探していなかった。唯一記憶にあるのは、両親の顔。母が日系人で父がアフリカ系だったこと。でも、それだけ。

レイアが反政府のゲリラ組織に誘拐されたのは五歳の頃。その時のことすら記憶は曖昧だ。おそらくはシロガミ家の住んでいたどこか偏僻の村を、どこかの反政府ゲリラの一昧が襲った。それだけのこと。決して珍しいことではない。

反政府ゲリラ達は必要な物資、主に水と食料を求めて村を襲い、ついでとばかりに戦力補充として子供を根こそぎ奪い取った。親は皆殺し。抵抗した子供も殺された のだろう。レイアはほとんど何も覚えていないのだ。

はつきりした記憶の中で最も古いものは、銃を撃つ訓練をしたこと。AK-47、カラシニコフ。世界で最も普及しているアサルトライフル。子供が戦場に立つことを飛躍的に簡単にした銃。人類の発明したなかで、最も多くの人間を殺した兵器。マンターゲットを的に、それを撃つ日々をしばらく送った。ある程度技術ができるあがると、実戦に投入される。

その破格の扱いやすさからか、それとも天性的に腕がよかつたからか。レイアはすぐにその銃を使いこなすようになった。収弾のあまりよくない銃にも関わらず、多くの人間を撃ち殺した。レイアのような幼い子供は、戦闘の際に大人達の弾除けのため、隊列の最前列に立たされることが多い。敵には事欠かなかつた。狙つた方向に、弾は思い通りに飛んで、人がばたばたと、おもしろいように倒れていった。あるいは、地雷避けにと、真っ先に地雷原に突入を強要されることもあった。目の前で戦友がバラバラになって死ぬのを何度も

も見させられてきた。

戦闘での活躍は上々。だが、生活はつらかった。その性質上、日々隠れてすごすことを強いられている組織であるため、日々の生活環境は劣悪の一言に尽きた。物資の不足も著しく、限りある食料はほとんどが大人達の口に入り、レイア達に渡るのはなんとか飢えをしのげるだけの量。最初から使い捨ての戦力なのだから、十分な栄養など必要なかつた。

戦闘の最中に負う怪我も、大人達はなんら対処をしてくれなかつた。だから自分達でなんとかするしかなかつた。町なり村なりを襲撃した際、チャイルドソルジャー達はめぼしい民家に押し入つて中にある医療品を略奪していった。中に住民が隠れていたならば、容赦なく殺した。殺すなら、兵士も民間人も同じだ。最初のころは感じていた良心の呵責は、いつの間にか消え去つていた。それにとってかわるよう、自らをなんとしても守る。それを第一義に行動するようになつていた。ともかく、略奪した医療品は仲間内で分担して保管した。

そういえば、大人達に与えられた「薬」がひとつだけあつた。それは戦闘の直前に渡される。いわく、これを飲めばたちどころに強くなれる薬だという。そんな馬鹿げた話はない。しかし薬について何の知識もない子供達にとつてはそんなものの存在を否定することなどできなかつた。それで少しでも生き残れる確率が上がるならと、喜んで飲む者もいた。あれほど憎い大人のくれる薬であつても、だ。子供とはそういうもの。大人達の都合によつて容易く洗脳されてしまつ。

もちろん、そんな都合のいい薬なんて存在しない。後に知つたことだが、それは弾丸に使われる火薬だつた。それに含まれるトルエ

ンという物質が、服用した者を高揚させ恐怖心を取り除く。主観的には、確かに強くなつた、気がするようになる。たとえ撃たれても死はない。そんな妄想を抱くようになる。当然、変わるのは気の持ちようであり実際の戦闘能力に変化はない。ただし、精神が高揚し正常な判断ができない兵士というのは、敵にとつては恐るべき脅威だ。命を落とすという恐怖を微塵も抱かず、アサルトライフルをぶつ放しながらまつすぐに突撃を仕掛けてくる敵。戦法や兵法の基本を真っ向から否定した戦い方は、敵味方問わず大量の死者を出した。それに、トルエンには依存症があるらしい。つまり、これを服用した人間は、強烈にこれを求めるようになる。紛れもない。麻薬だの一種だ。

ある程度の年齢に達した少女兵は、大人達の慰み者となる。彼らのリーダーや幹部の「妻」に任命された少女は、その男の身の回りの世話や性的な欲求のはけ口となることを強要される。ただ、そのような立場にいると前線に立つ機会は格段に減るため、自ら妻に志願する少女もいたのだが。

レイアは、そんなことはまっぴらだと考えていた。だから、いつか脱走してやろうと思った。それを実行に移したのは、十一、二歳の時。レイアが作戦をたてた。仲間数人巻き込み、一緒に逃亡しよう。そういう話だった。このゲリラのベースキャンプは森林地帯の真ん中にある。うまくいけば、隠れつつ遠くまで逃げられることは可能だ。

その日の夜、銃を抱えてむづくりと起き上がり寝場所から抜け出る。大人達にばれないようにゆっくり移動。途中で二手に分かれた。

一方は囮で、騒ぎを起こして大人達の注意をひきつけておき、その隙にもう一方が逃げる。その後、先に逃げた側が少し離れた場所から援護して囮役の逃走を助ける。味方にはそう説明していた。誰もその作戦に反対しなかった。その作戦に参加した仲間は七人。レイアは先に逃げる組で、同じ組には他に、同じ歳の男の子と、ずっと幼い女の子。囮組は、十三～七歳の年上が四人。年長者の方が戦闘力が上という理由で、選んだ。

別行動に移つてから五分ぐらい後、背後から銃声が聞こえた。急いで身を隠す。別働隊が行動を始めた。すぐに大人達の怒号が聞こえ、レイア達は身を小さくした。大人達が陽動につられて離れるのを待つて再び動き出した。しばらくして行動再開。といつても、森の中をひたすら逃げるだけ。後ろから聞こえていた銃声は、いつの間にか止んでいた。代わりに別の騒ぎが起こつているようだつた。脱走者がいることに気付いたのだろうか。たぶんそうなのだろうが、レイアはなにも言わなかつた。そのまましばらく無言で歩いたが、不意に、同行していた男の子が立ち止まつた。聞けば、追手が来るだろうから、食い止めると言つ。レイアは精いっぱい辛そうな顔をして引きとめたが、彼の意志は固く、もと来た方向へ戻り始めた。レイアはそれを見届け、もう一人の同行者の女の子を見つめた。そして、ナイフを取り出し、同行者の右手首を一閃、切り落とした。突然のことに状況を理解できない女の子に、レイアはかがんで目線を合わせ言つた。ふたりで別々の方向に逃げた方が、両方とも助かる可能性が高い。

女の子はドクドクと血を流しながら頷いた。幼く、人を疑うことを見らぬ悲劇か。こうしてレイアはひとりになり、そのまままんまと逃げおおせた。

囮部隊を助けようなどとは、微塵も思わなかつた。

「その後は……まあ、しばらくはストリートチルドレンみたいなことをしてまして、それから傭兵を始めました」

話はここで終り。ダン達三人の聴衆は、啞然とした表情でそれを聴いていた。いや、最初その顔には疑問が浮かんでいた。それを自分で解決して、こうなったのだ。

ダンが一同を代表して口を開いた。

「あー、なんだ。レイア。つまりお前は……最初から自分だけ生き残るつもりで作戦を立てた、と？」

「はい。…………巡回には、ゲリラの所有するテントを占拠して戦うように『お願い』しました。ええ。テントに立て篭もってです。…………布製のテント。銃弾は簡単に貫通する。それでも彼らは私の言葉をあつさり信用しました。というか、だまされた、ですね。みんな、そんなに頭を使うような人じやなかつたですから。案の定すぐに全滅。それでも大人達を何人か殺したんでしょうし、負傷もしたでしょ。十分に騒ぎを起こしてくれた。大人達から見れば、混乱が収まつてほつと一息。次にすべきことは？ 他のチャイルドソルジャーの様子を確認することだけではないです。負傷者の手当や死体への処置もしないといけない。必然的に、確認に手間がかかるわたくし達がいなくなつたことがわかるのも遅れる。追手の数も少なくなる」

「…………」

「一緒にいた男の子というのは、まあそういう性格の子でした。仲間がなにより大切つていう、自己犠牲の心にあふれた少年。扱いやすいことこの上なかつたです」

「そして、最後の幼い女の子。あれは、血を流したままで逃がすことで、敵に間違つた血の跡をたどりせんことができる。そういうことか？」

「はい。単純ですが、効果的です……そんなことがあって、わたくしだけ逃げることができました。当初の計画どおりに、です」レイアの話が終わると、しばらく場を沈黙が支配した。それを破つたのはダンだ。

「…………なるほど。レイアがどういう人生を歩んできたか、よくわかった。それで……なんだ。苦労してきたんだな」

「…………」

確かに苦労はしてきた。しかし、それは誰かに同情されるための苦労ではない。生きたのものだ。それに、今の生活だって大変なのは一緒じゃないか。

「えっと……ですね。あんまりわたしの過去については触れてほしくないってのが本音なのですが。確かにチャイルドソルジャー達は異常ですし、それを悪しそうに言つのは構いません。でも、昔の自分がこのことはあんまり好きではないので…………」

ジエスターとリリがチャイルドソルジャーについてなにか話していた。大いに結構。もちろん、この話が嫌いな人もいるから、ダンがこれをたしなめたのも構わない。しかし理由はそういうのではなくかったようだ。レイアの心情を気遣つた。普通に考えれば、その心遣いはすばらしい。そもそも、彼らと知り合つて一ヶ月弱。レイアがチャイルドソルジャーであつたことは、なにかの拍子で一度だけ言つてしまつたにすぎない。それをちゃんと覚えていた。人間として、これは称賛に値することだ。しかし、レイアにとつてはそれは迷惑。思い出したくもない過去を呼び覚ますこと。

結局、忌々しいだけの過去を語ることになつてしまつた。仲間、それも戦場で偶然居合わせただけの仲間にだ。

レイアはかぶりをふり、その思考を頭から追い出した。いざれにせよ昔の話。今には関係ないことだ。

リリとジエスターは嫌な話を聞いてしまつたばかりにつつむき、無言のままでいる。ダンも同じく。気まずい無言のその場をとりつ

くろうとしているが、言つべき言葉が見つかっていない。
そんな空氣も嫌いじゃない。あるいはそれを楽しもう。

その沈黙は不意に破られた。それは人の声ではあったが、この四人の声ではない。この戦争で雇われた兵士に支給された無線機から連絡があつた。いわく、

「敵リーダーの隠れ家がわかつた。…………この戦争も、もうすぐ終わるかもしけんな」

ダンのその言葉にだれも反応しなかつたが、内心では皆同じことを考えていた。

「まあ、とにかく行こう。なにかするのは仕事を終えてからだ」「その通り。さつと終わらせてしまおう。それが傭兵の仕事なのだから。

それは三階建ての建物だつた。一階は酒場。二階と三階はその店主と家族の居住スペースらしい。おそらくは革命グループの会場の場なのだろう。捕縛した革命グループのメンバーを拷問したら、ここで吐いたらしい。一見したところ、中には人の気配は無い。誰かが潜んでいるのだろうが。

レイア達がそこに着いた時には、すでに正規の軍隊や他の傭兵が大勢集まつていた。建物は包囲され、あとは突入するだけ。中に首謀者がいればそれで終わりだ。

軍部の偉い人と思しきが、なにやら傭兵を集め何か言つてゐる。どうやら突入作戦の説明のようだ。

「入口は二つ、店の入り口と裏口だ。裏口に関しては厳重に錠がかかるつていて、バリケードすら置かれているようだ。無理に突破できないことはないが…………その隙に上から銃撃されるんだろうな。

軍に頼めば口ケットランチャー撃ちこんでくれるだろ？が、どうする？」

「ジェスターが話を聞いて教えてくれた。その問い合わせに対する質問は、少し保留。

「もうひとつ入り口は？」

「比較的手薄だな。店の入り口で、ガラス張り。鍵はかかってるが、力押しで破れる」

「比較的なんてものじゃない。銃撃でガラスを割れば、大量の兵を一気に突撃させられる。しかし、

「罷かもな」

ダンは難しい顔でそう言つた。そりやそうだ。話がわかりやすすぎると。

「複数ある侵入口のうちひとつを残して完璧に防御。ひとつだけわざと手薄にする。そしておいて中の兵士は手薄な箇所に重点的に配置して、まんまとそこを攻撃してきた敵に集中砲火を浴びせる。よくある戦法ね。民間人あがりがそういうことを思いつくかどうかはわからないけど」

リリの指摘。ダンが応えるには。

「それは十分にありえる。敵のリーダーのことを考えれば、な」

革命の首謀者はここまで正規軍を苦しめてきたのだ。当然、油断ならない相手だというのはわかりきついている。

「が、だからと言つて裏口を攻めるわけにもいかないだろ？」

これはジェスターの言葉。その通り。ここは正面突破するしかない。

「入口に派手に銃撃。敵を沈黙させて俺達が突入。できるなら首謀者を捕縛。これが軍部の作戦」

作戦というほどのものではないが、それしか手はないだろ？突入は傭兵たちに任せて自分達は安全な位置で見守る。そんな軍の姿勢は気に入らないが、それは仕方がない。

軍人が複数、店の前に一列に並んでいる。それぞれが肩にRPG-7を担いで一点を狙っている。そんな光景が見られるのはほんの一瞬だった。軍の司令官が合図をすると、ロケット砲が次々に店内に撃ちこまれていった。ガラスが粉々に砕け、建物内部で爆発が起つた。破片が酒の置いてある棚に当たつて酒の瓶が割れた。中身がガラスとともに飛び散つたが、幸い引火はしなかった。

砲火が止むと同時に傭兵達が何人か店内に突入していった。中にはまだ敵が潜んでいるのかもしれないのに、そんなことお構いなしのようだ。勝利を確信して功を焦つているのか戦闘狂が道楽でやつてる傭兵なのか。どっちでもいいし、そういう傭兵がいることはわかっている。しかしこれはあまりにも無謀だ。

「おい、俺達も行くぞ」

ダンがそう言った。その声には、どこか差し迫つた感情が含まれていた。こちらも急いだ方がいいか。四人は一斉に走り出す。直後に銃声が聞こえた。前方の店内だけではなく、後方からも。振り返ると司令官が血を流して倒れていた。狙撃か。他の軍人達は狙撃手の位置を掴めず右往左往している。利口な者や他の傭兵達は我先にと建物の中に退避していく。

しかし中も地獄であることは変わらなかつた。カウンターの向こうに隠れていた敵が急に姿を現して銃弾をこちらに浴びせる。先走つて突入していつた兵がそれを食らつて血をふき倒れた。それを踏み越え、敵に銃撃。敵は瞬時にしゃがんでカウンターの陰に。ジェスターが手榴弾を投げる。お見事カウンターの向こう側に入り、すぐには爆発した。たぶん無事ではないだろうが、そちらに駆け寄る。案の定、体のあちこちから血を流しながら金属片が刺さりながら、敵がひとりむづくりと起き上がつてきた。銃のストックで殴ると頭蓋骨の割れる音がして相手の体が地に崩れた。他はみんな死んだか。

「リーダーは！？」

リリが辺りを見渡しながら声をはりあげた。外では激しい銃撃戦がくりひろげられていた。敵リーダーの姿は見当たらない。ぐずぐずしている暇はない。どこにあれだけの戦力を残していたのかは不明だが、革命軍の兵士が店内になだれ込むのも時間の問題だろう。敵の統率力は侮れず、こちらの軍部の司令官は死んだ。

刹那
外傳

「なんなの!?」

「車！ 車に爆薬搭載して突撃させたんだ！」

一
奇
之
外
一

一斉に外に向けて銃撃。どうせ外の味方は壊滅状態だろう。そのことは皆分かっていた。しかしわかっていることと、それに冷静に対処できることは全く別物だ。

「ああああああああああああああ！」

ダンが階段に駆け寄り兵士の死体をキヤツチ、それを盾に死体越しに銃を撃つ。少し遅れてレイアも応戦。階段の上にいた敵をハチの巣に。

「ダン！ 外から撃つてきてる奴がいるぞ！」

ジエスターの声。その通り。店内に銃弾が流れてきて兵士達がバタバタと倒れていった。ジエスターとリリ、その他数名だけが咄嗟にカウンターの陰に隠れて難を逃れた。

「ダン！ レイア！ ジーは私達に任せて上に！ リーダーはたぶんそこにいる！」

言われなくともそうするとも。リリの言葉を背に、ダン先行で階段を駆け上がる。背後で爆発音が聞こえた。ジエスターが投げた手榴弾だろうか。なんとか耐えて欲しい…………

不幸なことに、敵のリーダーはかなりのやり手だ。この場所がいざれ敵に見つかり、包囲されることは予見していたのだろう。だから対策を練つた。集まつた兵が建物や中の兵士、要するに内部にばかり気を取られるようにしておいて、外から攻撃をしかける。その作戦にまんまと乗せられたわけだ。もしかすると、リーダーはここにはいないのかもしれない。

それは、ここにいる仲間を見捨てられるような人物ならばの話だが。

建物の一階。人影はない。部屋が四つある。そのどれかに革命軍のリーダーが潜んでいるのか、それとも三階にいるのか。ひとつずつ部屋の前に並んで立つ。ダンが扉に手をかけ一気に開き、同時に中に突入する。無人。クローゼットがあつたので一、三発撃ちこんだ。反応なし。

「クリアー！」

制圧。そう宣言し、次の部屋に。突入、無人。次の部屋も同じ。やはりこの階にはいないのか。最後の部屋の前に立ち、扉の取っ手に手をかける。息をひそめて中から音が聞こえないか探る。無音。このまま一気に扉を開ける……

「つ！ 上だ！」

ダンが叫んだ。咄嗟に上に銃を向ける。上の階から階段を下つてこちらに向かう兵士を見つけた。撃つと再び上に退避していった。逃がすものか……

「待て追うな！」

ダンがそう言つて開けようとしていた扉を蹴破つた。男の、野太い悲鳴が聞こえた。扉の向こう側にいたのか。敵はひとりではなかつた。今扉越しに蹴飛ばされたのとは別に三人、こちらに銃を向け

ている。その姿を確認するかしないかのうちにダンは銃撃を始めた。一瞬にして死体になる敵兵。と、さきほど蹴られた男がなんとか立ちあがり、ダンに襲い掛ってきた。これの得物は斧。それを振り下ろしてきた。ダンがそれを銃で受け止める。助けようとしたが再び階段から敵兵が降りてきた。

「レイア！ ここは俺に任せて上に行け！ リーダーはそこだ！」

「わかった！」

振り返り、敵に銃弾を浴びせる。再び退避する敵、しかし逃すものか。マガジンを交換し、追いかける。階段の下で見上げるよう銃口を向け、間髪いれずフルオート射撃。上部で待機していた敵を蜂の巣に変えた。リーダーを求め、階段を上る。三階は少し狭そうだった。アサルトライフルを背中に担ぎ、拳銃を二丁取り出した。上った先には部屋がひとつだけ。ドアノブを撃ちぬき蹴つてドアを開けた。すかさず、開けるなり襲ってきた男を撃ちぬき、次に両脇で構えていたのも射殺。それから部屋にいた、武装していそうな人間全てを狙つて撃つた。

あとに残つたのは、寄り添い合ひ怯えている十数人の非力そうな女子供。そして、成人男性がひとりだけ。

その男に片方の銃を向ける。もう片方は、非戦闘員の額に狙いを定めておいた。

「あなたが首謀者ですね？」

「あ……ああ。君は……」

「見ての通り、傭兵です。あなたを捕縛しにきました」

「嘘だ！」

男はヒステリック気味に叫んだ。

「本気で言つてるのか！？ 君みたいな……小さな女の子が傭兵だなんて！」

やれやれ。今まで何度も何度も聞き飽きた言葉をまた聞かされた。傭兵の素性など、これほどどうでもいいものもなかなかない。

「もう一度言います。わたしは、あなたを捕縛しにきたんです……

抵抗するならば、あなたの周りのこの人たちの命は保証しません」

女子供達の怯えがさらに深くなつたようだ。さつきまで殺してきた大勢の人間。彼らの妻や子が、この中にどれほどいるのだろうか？

「ま、待て。わかつた。大人しくしよう。だが、彼女達に手を出さ

ないでくれ。彼女達に罪は無いんだ。私はどうなつてもいい」

「それは、わたしではなく國の偉い人が決めることです。わたしの役目は、あなたを生きたまま彼らの前に連れて行くですから」

その時のリーダーの落胆した表情といつたら。少し氣の毒にはな

つた。しかし、仕事は仕事なのだ。

民主主義やら平等やら、あるいは正義などを求めて立ちあがつた

男の夢を打ち碎くのが仕事なのだから。

「じゃあ、両手を頭の後ろで組んでください。それから…………」

リーダーはその指示に従つた。後ろから足音。ダンのようだ。気がつけば、外での戦闘音もすでに聞こえなくなつていて。

内戦の終結か。

終 疑問

革命軍の主導者を国の中層部に引き渡してから、全てがつまくいった。國のお偉方達はその手柄に大いに喜んでいた。成功報酬が予定よりも少し多めだったのはこれが原因なのだろうか。もつとも、報酬を払うべき他の傭兵たちが大勢死んだから、金は大量に浮いたのだろう。なんにしても、よいことだ。

この国がいすれたどるのは、間違いなく崩壊の道だ。この革命によつて、多くの人間が死んだ。貴重な労働力が消え去つた。生き残つた者のほとんどは、女性と子供ばかり。内戦による破壊の跡を修復する力も存在しないだろう。にもかかわらず、国家は今まで国民に強いてきた仕打ちと同じことをしようとする。この国の体制が崩れるのはそつ遠くないことだろう。いすれにせよ、レイアには関係ないことだ。

やるべきことが終わつたのならば、この国に用は無い。早いところ立ち去るべきだろう。ダン達に別れの言葉を告げる氣にもならなかつた。共に死線を潜り抜けた仲間と別れるのをなんとも思わないのかと問われれば、それは嘘になる。しかし、こういう関係だとうことはお互いにわかつてゐるのだ。

ひとりで国境近くまで歩くことにした。戦時は担いでいたアサルトライフルは分解して荷物の中にしまつておいた。拳銃はすぐに出せるようにしておく。これで一見しただけなら傭兵に見られることはない。こういう場所であつても、人は銃を持つた他人に警戒されるものだ。誰かに無意味に警戒される必要はないし、傭兵に恨みを持つ革命の生き残りもいるだろう。少なくとも国境を出るまではこうしていよう。それからは……

「おーい！」

「？」

背後から知つた声が聞こえた。ダンか。じつしたのだろうか？
「追いついた……なあ、これからどこに行くつもりだ？ なんか予定があるのか？」

「えーっと、まだなんにも。だからどこに行くつもりだ？ そこに行くまでです」

「そつか……俺は、一度実家に帰りたいと思つてゐる」

「そうですか」

「そうだ……つまり、俺の家族の住んでるところだが」「じつ西親ですか？」

「いや、妻と娘がひとつ……俺が言つのもおかしなことだが、本当によくできた家族だ。俺がこんな仕事してることを知つてて、俺のことを軽蔑したりしない。ちゃんと俺を夫や父親として尊敬してくれてて。職業に貴賤無し、だとよ」

「…………」

「本当に、誇れる家族だ。だから、会いたい。本当はこんな仕事じゃなくともつと普通の仕事が、毎日あいつらと顔を合わせられる仕事がしたいのだが……」

ダンの言葉はしりすぼみに小さくなつた。しばらくの間、ふたりは無言のまま並んで歩いた。

「…………なあレイア」

ダンが再び口た。今度は、どこか遠慮がちだつた。

「こうこうことを言つるのは無礼だとは思つ。君の生き方に口をはさむ権利は俺には無いし、君が見たら俺の言つてることは滑稽に映るだろ。だが……なあ、傭兵なんてやめて、もつとまつとつな生き方をしたいとは思わないか？」

「…………はい？」

「君と、俺の娘が同じぐらいの年頃だから……そんな女の子が銃を持つて戦つているということだが、どうしても納得できなかつた。……俺の勝手な言い分だし、やめたらどうするかなんてことも全

くかんがえてないが、でもこれが俺の思つてる正直なことだ。……

……本当は、チャイルドソルジャーなんてものの存在すら、嫌で嫌で仕方がない。しかし、気にはなつたからあんなことを訊いてしまつた……それで後悔した。本当にすまなかつた

なるほど。あれはそういうことだつたのか。

さて、どうしたものか。この男、意外に纖細なかもしない。あるいは、他人に気を遣いすぎる。なぜこんな仕事をしているんだろう？

「ダン。あなたの考えはわかりました。……わたしの身の上を案じてくれるのは嬉しいです。でも、わたしの生き方は、わたし自身で決めたいと思っているので……」

「そうか。すまんな。変なこと言つてしまつた。……俺が言つたかったのはそれだけだ。……じゃあな。達者に生きろよ」

ダンはそれだけ言つて、足早に先に行つてしまつた。

もう彼や、あるいはジョンスター・ヤリリーに再会する機会はほとんどないだろ？。それでいい。そんなことがあつたとして、敵同士でのご対面となることだつてありえるのだ。そうなるぐらいなら、一度と関係がないようにしたほうがいい。もっとも、そんなことは自分の意志で決められることではないのだが。

どうしてもそれを避けたいのならば、どうすればいいか？　ダンの言つた通り、この仕事をやめるしかない。しかし、そんなことをしたら、これからどうやって生きていけばいい？　そんなことは無理な話だつた。結局、かつての仲間と撃ち合つ日が来ないことを祈るしかないのだ。

仲間、か。かつて残忍で愚かな大人達から逃げた時は、そんなものを意識したことすらなかつた。

では、今は？　敵の隠れ家で銃撃戦になつた。その時、先行して

階段を駆け上がるダンの背中が頬もしかつた。階下に残してきたふたりの無事を心から望んだ。こんな感情を抱くことがあるなんて、そのことに驚いた。しかし、そんなことは今ではなんの意味も持たない。

あるいは……そう、いつかはこんな仕事をしなくなる日がくるのだろうか？　ダンの娘がどんな暮らしをしているかなんて知らないが、きっと先進国で豊かな生活を送っているのだろう。戦争や兵士のことなど、テレビやパソコンの画面越しにしか存在しない世界。そこで、先進国なりの贅沢な悩みをもつて生きているんだろう。それとも、どこかの正式な軍隊に配属されたりすることがあるかもしれない。戦争のたびに戦友が変わることがなく、誰か心から信頼できる仲間ができる……

やめよう。ぐだらない妄想だ。そんなことよりも、今と現実に目を向けよう。今の状況から、そんな未来が生まれるなんてありえない。それに、そんな生活を送る自分を想像しても、そもそもそんな暮らしついての知識がない。まったくわからなかつた。わかりたいとも、思わなかつた。

終 疑問（後書き）

「ある内戦」完結しました。読んでくださった方は、本当にありがとうございました。

この話はフィクションです。なので、話の中で登場する人物や國家、戦闘は実在しないものです。また、実際にこういう状況が起ることもありないでしょう。現実の世界には軍事独裁政権というものはある多く存在するものではなく、紛争において傭兵が活躍するという状況も、実際には珍しいです。（傭兵という職業は、今でも存在はします）

しかし、いまだに世界のどこかで戦争は起っています。戦場に安全地帯などなく、どこを見ても死体が生まれ続けている。兵士は銃の射出装置の一部でしかなく、銃弾の雨の中で生き残れるかは運次第。そんな中で大人だけではなく小さな子供が銃をぶつ放す。これは、実際に存在する光景です。

そんな光景を書いてみたい。そうして生まれたのがこの作品です。拙い文章ではありましたが、これを読んで皆さんにもなにか思つことがあつたとしたら、幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8979m/>

ある内戦

2011年1月19日22時10分発行